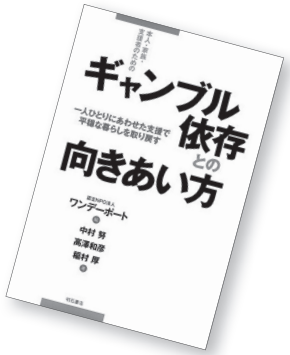
「ギャンブル依存との向きあい方」



著者：認定 NPO 法人　ワンデーポート
出版：明石書店
発行：2012 年 5 月 31 日

「ギャンブル依存」あるいは「ギャンブル中毒」という言葉は、誰もが耳にしたことがあるだろう。また、これらの問題を扱った書籍も多く出ており、精神科医の著書から専門的な知見を得ることもできる。本書に特徴的なのは、「著者自身もギャンブル依存に苦しみ」「そこから回復した」経験をもとに書かれていることである。ごく普通の生活を送る学生が、ふとしたことからギャンブルに接し、やめられなくなり、ついには借金の返済のために犯罪に手を染めてしまう、という述懐を読むと、他人事ではないように感じる。

本書では以下のように断言する。「ギャンブルが原因で嘘をつき借金するのはギャンブル依存症という病気です。病気なのですから専門家の医師の診察を受け、ギャンブル依存症の人たちが集うミーティングに参加しましょう。」（p.3）

「ギャンブルを止められないのは自分の意思が弱いからだ」というように、依存症に陥るのは本人の責任であるという言説がみられるが、「病気」なのだから、「自分の意志で治す」ことを考えるのは筋違いである。

自分が依存症でありことを知り、治療が必要であると自覚するまでに相当な時間を要するのがギャンブル依存症の被害を大きくしている。「この程度なら娯楽の範囲内」「すぐに止められる」と考えている間は、ギャンブルのために学校や仕事を休んだり、借金をしても、治療しようと思えないからである。同書で言う「底つき」の状態、すなわち犯罪行為によって逮捕されたり、借金が返せなくなったりして、自分にとってどん底まで落ちたことを自覚しないと、治療を始めようという気にならないからだ。

回復を目指すための、GA（Gamblers Anonymous）：ギャンブル依存症に悩む人たちの相互援助組織に加入することから、依存症からの脱却が始まる。そこでは、自分と同じような体験をした人の失敗談を聞き、互いにギャンブルに戻らないように約束する、というタイプのミーティングが繰り返される。

ギャンブルだけでなく、アルコール依存症にも同様の組織があり（Alcoholics Anonymous）、そこでも同様のミーティングが行われることから、両方に通う人も居る。

ギャンブル依存症の問題を、さらに複雑にしているのが、家族の受ける被害である。ギャンブル依存症に陥った当人は、（少なくとも底つきするまでは）さほど苦痛を感じない。もちろん依存症であるという自覚もない。

ところが、当人が作った借金を立て替えたり、学校や会社を休んだりした「問題行動」を心配し、時には尻拭いしようとする家族には、はるかに大きな負担がのしかかる。当人のためにと思って借金を清算したことが、さらにギャンブルを続けさせる原因になるという、「共依存」状態も見られるようになる。ギャンブル依存症においては、本人だけでなく、家族に対する指導も必要になってくるのである。

本書では、家族の一員がギャンブル依存症であると判断された場合の、家族に対する支援についても、従来の方法に疑問を呈する。すなわち、従来の家族支援の要点は（p.153）

1．依存症は病気であることを理解する
2．家族が借金などを返済するのは共依存に陥っているからである
3．本人が底つきなどで自分を変えようと認識しないといけない
4．本人や家族が相互援助グループに参加すべきである

というものであった。本書では、本人が「なぜギャンブルに依存するのか」という原因にはいくつかのタイプがあり、それぞれに応じて対応を変えるべきである、と主張する。つまり、画一的に上記の方針を提示されても、家族にとって適切なアドバイスであるとは限らないのである。

本書では、金銭管理能力の高低、生活能力の高低、相互援助グループによる支援が効果的か否か、といった視点から、本人をいくつかのタイプに分類する。

生活することは自力でできるが、ギャンブルに依存してしまう「依存症タイプ」、自立や社会生活に問題を抱えつつキャンブルにのめり込む「発達障害タイプ」、仕事上や家庭内のストレスを発散するためにギャンブルにはまる「キャパ小タイプ」、10 代の若いころからギャンブルにはまり、早期に破綻した「若年タイプ」、精神疾患によって社会生活が困難になりつつギャンブルを行う「心の病をもっているタイプ」である。

これらのタイプごとに、効果的な支援の方法が異なるために、まずは本人がどのタイプに入るのかを、家族と共に確認し、そののちに支援方法、さら

には家族の役割を決めるべきだというのが本書の主張である。

多くの入所者を支援してきたことから得られた知見は、非常に説得力の高いものである。自分がギャンブル依存であるとは誰も認めたくないし、家族が借金を重ねても、何とか返済を支援してあげようと考えるのも自然な行動であろう。そういった自然な行動の積み重ねが、多額の借金や犯罪行為といった結果につながるのがギャンブル依存の怖さである。本書では、多くの「失敗例」が掲載されており、「普通の生活をしていた人がギャンブ依存に陥る」物語がよりギャンブル依存症に対する怖れを強くする。

従来私たちは、ギャンブル依存症を「自分たちとは別世界の人たちの問題」ととらえてしまっていたように思う。ギャンブルを止めない本人にも、止めさせることができない家族にも責任がある、と。

今後私たちに必要とされてくるのは、依存症に陥る可能性のある人を発見し、より重度な依存症に進むことを防ぎ、依存症の状態にまで進んだ人であれば回復施設を勧めることができるように、依存症への理解を深めることであろう。

暗くなりがちなギャンブル依存の問題を、現状を嘆くよりも解決方法を考えよう、という筆致のおかげで前向きにとらえることのできる好著であった。

起業教育委員会　委員
大阪商業大学　総合経営学部　公共経営学科
教授　松村 政樹